よねだところどころ

第三十七号

ヨナダーが下米田・牧野の色々な見どころを紹介するよ

西脇　天神社と安養寺

アンヨウジ

前号で、西脇の天神社について説明をした。中世の神仏習合思想に伴って、お寺と神社の運営が表裏一体となって行われていたことを、現代の人が理解するのはなかなか困難である。明治維新以後、神仏分離が行われ、国家神道時代という経過を経て、さらに太平洋戦争後の混乱期・高度経済成長・科学技術の発展とともに神仏に対する国民の宗教的感覚が大きく変化したことが原因であることに疑いはない。

上地図(ゼンリン住宅地図をもとに水路などを挿入)によれば、天神神社の北に区画の特徴的な場所がある。(安養寺推定場所)その前を水路が天神神社を巡るようにしてある。また、東は水田で旧飛騨川跡で、一段低く水田として利用されている。佐合氏の米田物語と併せて考えればこれが安養寺の跡ということになる。安養寺は天神社と習合していたが、神仏分離の影響で天神社が残ったものと考えられる。また、この付近に薬師寺という地名があり、ここで安養寺に祀られていた薬師如来が、光徳寺境内に移転したものと考えられる。

さて、「西脇」という大字について少し考えてみたい。美濃国加茂郡誌によれば、土地の位置からくる地名であるとされる。確かに、下米田地区の「西」にあり、小山・東栃井・今・為岡に接する。「脇」わきは、側(そば)という意味を示すことから本体の、あるいは中心からみての側(そば)、すなわち下米田の中心から西にはずれた側にある場所を示していると解釈できる。もしこれが、飛騨川の側(そば)というなら西という概念はでてこない。

濃州徇行記による記述

西脇村は、飛騨川の側にあって、村は南北に長く農業が中心である。他村に出作りする農家も多く、豊かとはいえない。竹林が続き、平坦地であるこの村は日当たりは良好である。土地は砂混じりで、村の東に水田がある。この水田は池による灌漑用水である。段丘崖下には沼田が見られ、裏作は少ない　とされている。